

パーシャルデンチャーによる補綴歯科治療の理論と実践

明海大学歯学部機能保存回復学講座
歯科補綴学分野 教授 大川 周治

現在、日本は超高齢社会への突入とともに、部分歯列欠損患者の増加が必至となっています。したがって、パーシャルデンチャーを応用した補綴歯科治療は、今後の歯科医療において、重要な役割を担うことになるでしょう。

部分歯列欠損症例では、残存組織の病態が多種多様なため、ともすれば補綴歯科治療のゴールを見誤ってしまう可能性があります。補綴歯科治療を成功に導くためには、当然のことながら、初診の段階で、治療が完了した状態を把握するとともに、その状態を目指して時系列で治療計画を立案することが肝要です。特に、咬合支持を喪失した症例における咬合採得（顎間関係記録）は、補綴歯科治療の成否を左右する重要な臨床術式の一つです。

従来より、垂直的顎間関係記録に関しては下顎安静位、嚙下位、発音位などの基準となる下顎位（以下、“基準下顎位”）や顔面計測法などが応用されてきました。しかし、下顎安静位においても個人差が大きく、下顎安静位利用法とともに複数の方法を併用することが臨床的には推奨されています。すなわち、いずれの方法においても基準下顎位としての安定性が高いとはいえ、唯一的、確定的な方法が存在しないことも事実です。本学歯科補綴学分野では、全部床義歯装着者における「ん」持続発音時の下顎位（以下、“「ん」持続発音位”）が健常有歯顎者の咬頭嵌合位に極めて近接するとともに、下顎安静位と比較してばらつきが少ないことを明らかにしました。従来の垂直的顎間関係記録法における特徴や問題点を再考するとともに、「ん」持続発音位の基準下顎位としての有用性とその応用方法について紹介します。

一方、水平的顎間関係記録においては、筋触診法、Walkhoff 小球利用法、ゴシックアーチ描記法などが応用されてきました。ゴシックアーチ描記法は、その手技の煩雑さ故に日常の臨床術式として実践されているとはいえません。しかし、パーシャルデンチャーによる歯科補綴治療の最重要ポイントが、この水平的顎間関係記録にあることはいまでもありません。残存歯を有する咬合支持喪失症例における咬合採得の実践例を通じて、補綴歯科治療の在り方について解説いたします。なお、私は、咬合採得とは中心咬合位を採得することであり、その採得した中心咬合位と補綴装置の咬頭嵌合位を一致させることが、食べる機能を改善する上で最も重要なポイントだと考えています。部分歯列欠損症例の病態を、形態と機能の観点から捉えつつ、パーシャルデンチャーによる補綴歯科治療を成功に導くための要点について、臨床例とともに解説させていただきます。

なお、（公社）日本補綴歯科学会が2019年4月に導入した補綴歯科修練医・認定医・専門医制度等、本学会の活動に関しても、少しだけ紹介させていただければ幸甚に存じます。

特別講演（とちぎ歯の健康センター 3階研修室）

「患者・家族とのコミュニケーション」

SOMPOリスクマネジメント株式会社
医療・介護コンサルティング部
主任コンサルタント 関 悠 希

【概要】

- ・苦情発生予防の観点も交え、患者・家族と円滑なコミュニケーションをする簡単なテクニックを解説します。

【研修の狙い】

- ・患者・家族が医療機関に対して不安・不満を持つ背景には、コミュニケーションの問題が存在しているケースが少なくありません。患者・家族から信頼感を得るためのポイントをご紹介します。
- ・ミスコミュニケーションの積み重ねによる苦情やクレームの発生を防ぐことも目的として、患者・家族と円滑なコミュニケーションをするためのテクニックを学びます。

【主な内容】

- ・コミュニケーションにおける相手側の心理
- ・相手に安心感を与える関わり方
- ・効果的な質問話法